（別紙１）

論文の内容の要旨

論文題目　インド古典討論術研究
—ウダヤナ『ニヤーヤ・パリシシュタ』における詭弁と敗北の場合—
氏　　名　小野卓也

本論は，中世のインド論理学で大きな功績を残したウダヤナ（ca.1050-1100A.D.）の著書『ニヤーヤ・パリシシュタ（*Nyāyapariśiṣṭa*，論理の補遺）』全章を研究するものである．この文献は，バラモン教学の一派であるニヤーヤ学派が立てる16項目の最後の2つに位置する「詭弁（jāti）」と「敗北の場合（nigrahasthāna）」だけを扱い，同学派の根本聖典である『ニヤーヤ・スートラ』でこの2項目を扱う第5課の註釈・解説という形式を取りながら，従来の註釈者にはない新しい見解をふんだんに盛り込んでいる．この領域はニヤーヤ学派と仏教徒が『ニヤーヤ・スートラ』の成立前後から約1000年間にわたってメタ議論（議論に関する議論）を繰り広げてきた．詭弁に関してニヤーヤ学派を批判した仏教徒ディグナーガ（6c.A.D.）の『集量論（*Pramāṇasamuccaya*）』に注釈の梵文写本が近年発見され，敗北の場合に関してニヤーヤ学派を批判した仏教徒ダルマキールティ（7c.A.D.）の『ヴァーダ・ニヤーヤ（*Vādanyāya*）』についても研究が進められる中、『ニヤーヤ・パリシシュタ』はこれまでほとんど研究されておらず，サンスクリット語の刊本はいくつかあるものの，それ以外の言語に翻訳されていない．その一因として，流通している刊本がそのままでは意味が取れない，または矛盾する箇所が散見されることがあった．

本論ではまず，流通しているティルパティ版ではなく，絶版となったコルカタ版に基づき，それぞれの元となったとみられる写本によるテキスト校訂を行うと共に，伝統的パンディットであるバーリラーム・シュクラ（Baliram Shukra）・プネー大学哲学科名誉教授の指導によって解読を進め，日本語への翻訳を行った．その内容をもとに先行する文献や注釈との比較を通して，インドにおいて討論術の理論が紀元前から始まり，多くの論者の手を経て理論的に発展してきた形跡を明らかにした．特に仏教哲学の発展によって認識論や論理学が盛んになった中世においても討論術が廃れず，ニヤーヤ学派にとっても仏教徒にとっても重大なトピックであり続け，思想史的発展も見られたことを示した．討論術の理論が発展する中で，『ニヤーヤ・スートラ』にも，内容の再検討が迫られることになった．聖典の文言を変えずに，従来の注釈者の解釈の変更するという作業に，著者のウダヤナは取り組んでいた．

『ニヤーヤ・スートラ』で説かれる24種類の詭弁においては，全てに共通する原理として，注釈者ヴァーツヤーヤナの「論式に差がないこと」やウディヨータカラの「反論と立

論と対等にすること」，さらにウディヨータカラの説を発展させた「論者の劣等」などを挙げた上で，最終的に「自己撞着（svavyāghāṭa）」という概念を新たに提示し，先行する注釈者の見解を再構成している．その一方で，『ニヤーヤ・スートラ』では限定的なテーマでしか用いられていなかったそれぞれの詭弁を「代喩（upalakṣaṇa）」という解釈手法を使って一般化し，ほかのトピックにも応用できるようにした．そのため詭弁同士の領域が重なる恐れが生じたが，『ニヤーヤ・スートラ』に説かれる24種類の分類を堅持し，それぞれの差異を注意深く論じている．差異を論じる中で，先行する注釈者の提示する例が相応しくない場合は適宜修正を加えた．その結果，雑多な論法集から，網羅的で例外のないリストを作成し，特定のトピックだけでなく汎用性のある論法集に改変することに成功している．

このような一般化によって，詭弁の論法は普遍的なものとなり，現代においても通用するものとなっている．揚げ足取りや，論証自体を破壊するような反論は，古代インドに限らず現代でも見られるが，自己撞着を指摘することによりその反論を無効化したり，相手の主張を抑え込んだりすることができる．一方，自分自身は詭弁ではない正しい反論を行うことがより厳密に求められることになる．

22 種類の敗北の場合においても，従来の注釈者の解釈を取捨選択して再構成しただけでなく，学派間の溝を配慮したルールを作り，議論の格率まで踏み込み，硬直化した伝統説はダルマキールティの批判をきっかけとしていくつか変更も加えた．詭弁とは異なり，敗北の場合に共通する新しい概念を提示していないが，それぞれの敗北の場合に「極意（rahasya）」を述べ，またほとんどの敗北の場合を詳細に分類している．この背景には先行する注釈者へのダルマキールティの批判と，それに対する注釈者ヴァーチャスパティ・ミシュラの回答があった．ニヤーヤ学派の敗北の場合に対するダルマキールティの批判点は主に，議論との関連性の薄さと相互の重複であったが，特に前者について，ウダヤナが詳細な分類を行い，議論に関係づけし直したことで，過去の遺物になりかけていた敗北の場合に再び実用性を甦らせることに成功している．ただしダルマキールティは一度も名指しされておらず，ダルマキールティが提示した敗北の場合への批判もないため，仏教徒との議論はあくまでヴァーチャスパティ・ミシュラを通した間接的なものとなっている．相互の重複には一定の配慮を見せるものの，議論の実際の場面に即した具体的な提示を行い，先行する注釈者の提示した例を詭弁以上に吟味し，再解釈や却下しているところも，ダルマキールティによる批判が間接的であれ大きな影響を及ぼしている．

このような手続きによって議論のルールはニヤーヤ学派特有のものからより一般的なものとなった．「共通の協約をもつ単語のみで述べるべし」「期待の順番によって述べるべし」「会衆が知りたいと欲求する限り話すべし」といった格率は，マジックワードで煙に巻いたり，聞き手の興味を考えないで延々と話し続けたりしがちな現代の議論においても十分通用する教訓となる．こうしてニヤーヤ学派は討論術を司る一派として，後代まで広い影

響力を築くことができたといえよう．

このように詭弁においても敗北の場合においても，ウダヤナの時代には過去のものとなっていた『ニヤーヤ・スートラ』の内容を一般化し，どんなテーマの議論にも利用できる仕組みを構築したのが『ニヤーヤ・パリシシュタ』の功績である．『ニヤーヤ・スートラ』の内容からある程度自由な立場で，討論術を論じたことことから，ウダヤナが『ニヤーヤ・スートラ』全体を注釈した『ニヤーヤ・スートラ・タートパリヤ・パリシュッディ』と別に，詭弁と敗北の場合を扱う第5課だけを取り上げて『ニヤーヤ・パリシシュタ』を著した著作動機が伺える．書名の「パリシシュタ（pariśiṣṭa）」には「補遺，残り物」という意味があるが，『プラボーダ・シッディ（目覚めの確立）』という別名があることからも，ニヤーヤ学派の中心テーマから外れるという含みではなく，これによってニヤーヤ学派の体系が完全なものとなるという意味合いだったのではないだろうか．そうであるならば，『ニヤーヤ・スートラ』で詭弁と敗北の場合を扱う第5課が，そのほかの14項目を扱う第1課から離れて成立したことと軌を一にする．

本研究は『ニヤーヤ・パリシシュタ』の読解を中心としているが，ディグナーガの詭弁に関する理論が最新の研究で明らかになりつつある現在，ウダヤナに至るまでのニヤーヤ学派と仏教徒との討論術の理論や議論のルールに関する思想史的な発展に新しい見地がもたらされるかもしれない．この見地に加え，さらにジャイナ教への影響なども踏まえて再び『ニヤーヤ・パリシシュタ』を読むとき，本研究では十分に明らかにできなかった相互影響が発見できるかもしれない．